

グローバルシティズンシップ教育と実践を担う教師のあり方

同志社女子大学現代社会学部 特任教授
日本国際理解教育学会 会長
藤原 孝章

藤原 孝章 (ふじわら たかあき)

同志社女子大学現代社会学部特任教授。兵庫教育大学教職大学院客員教授。

博士 (教育文化学)。1975年広島大学卒。1995年同志社大学大学院修士修了。

私立報徳学園中学校・高等学校教諭、富山大学教育学部教授を経て、同志社女子大学現代こども学科教授。

日本国際理解教育学会会長、全国社会科教育学会・日本社会科教育学会・日本グローバル教育学会理事など。専門は、グローバル教育、国際理解教育、開発教育、社会科教育、シティズンシップ教育。

(肩書は2018年10月現在のもの)

1 はじめに：自己紹介と書籍紹介

皆さん、ご紹介にあずかりました、同志社女子大学の藤原と申します。本日はこういう場にお招きいただきまして、立命館大学教職大学院の森田先生、荒木先生をはじめ、研究科長の先生にはお礼を申し上げます。

私はここにいろいろと肩書がありますけれども、実は兵庫教育大学の教職大学院の客員教授も兼ねておりまして、グローバルリーダー推進コースというか、国際教育的な分野のところのコースの授業を、現在、集中講義で持たせていただいております。

それから学会としては、日本国際理解教育学会の会長をさせていただいております。今、ちょうど理事の改選の時期に当たっております、任期は今年いっぱい切れます。

先日、中国の南京師範大学に行きました。中国ではグローバル教育を全球教育と翻訳するのですが、市民教育とは言いません。公民と言います。

中国は政府を挙げて国際教育、国際理解に取り組んでおります。政府のカリキュラムだけではなく、比率は決められていますが、南京市とか、そういう市や省とかの地方独自のカリキュラム、それから学校がつくれるカリキュラムがあるんです。ここがちょっと日本と違うところかなと思います。

ます。

今日は教師に関するお話です。私も現場の教員が長かったです。報徳学園の教員を22年間やっておりました。大学に出てまだ15年か16年ぐらいですので、中学、高校の教員の履歴のほうが長いのです。そういう中で、自分がどのようにグローバル教育、あるいは国際教育に出会ってきたのかということをお話したいと思います。

まず、『SDGsと開発教育』(田中治彦・三宅隆史・湯本浩之編、学文社)ですが、SGDsは、持続可能な開発のために17の目標を設定しておりまして、今、日本の政府・民間を挙げてこれに取り組んでおります。これに関する本を上智大学の田中先生と一緒に書かせていただきました。

同じように、『18歳成人社会ハンドブック』(田中治彦編、明石書店)という本があります。今年18歳成人の法律が通りました。2022年から18歳成人になります。それに関しまして、高校の、例えば社会科のカリキュラムでは、「公共」という新しい科目ができています。それから小学校では6年生が憲法を先に習うようになっています。今までは歴史でしたけれども、そんなふうに、学習指導要領にも影響を与えてくるような大きな社会の転換が3年後にはやってくると思います。

それから、『大学における海外体験学習への挑

戦』(子島進・藤原孝章編、ナカニシヤ出版)ですが、これは、グローバル・シティズンシップと非常に関係があるのですが、海外にスタディツアーとか行ったとき、学校の教員が学生と一緒に海外の現場でフィールドワークをして、どんな学びがあるのかということ、昔で言うと、総合学習とよく似ているんですが、今、多くの大学で授業科目になり、課題になっていることを本にさせていただきました。

それから最近出した翻訳で『教師と人権教育』(A.オスラー、H.スターキー著、明石書店)という本がありますが、これも、私たちは一体何のために子どもを教えるのかという根本的なことについて、子どもの権利も含めまして、あるいは女性のことも含めまして、教師教育としての人権課題と何か、というふうな翻訳を出させていただきましたので、また見ていただけたらと思います。

『学校と博物館でつくる国際理解教育』(中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編、明石書店)は、国際理解教育学会で出版したのですが、大阪の国立民族学博物館と連携した、博物館の展示を題材にした国際理解教育です。それから国際理解教育の議論と実践のようなものが、『グローバル時代の国際理解教育』(日本国際理解教育学会編、明石書店)と『国際理解教育ハンドブック』(日本国際理解教育学会編、明石書店)と2つあります。

それから、『現代国際理解教育事典』(日本国際理解教育学会編、明石書店)も、いろんな国際理解に関する用語に関して事典を作りました。

『日韓中でつくる国際理解教育』(大津和子編、明石書店)は、私たちは日韓中の関係が悪いときも、できるだけつながりを持とうとずっとやってきました。もう10年以上の歴史があるのですが、日韓中の大学の先生方、それから現場の先生方と交流を持って、国際理解教育について、今一緒にパートナーでやろうとしております。中国でやはり国際理解教育といったときに、私たちの学会のこういう出版物が結構読まれつつありますので、これも一つの成果ではないかなというふうに思っています。

『外国人労働者問題をどう教えるか』(明石書店)は、私の個人的な教育実践に関わるもので

が、私が最初に報徳学園で実践したのが、外国人労働者問題という授業です。

今は、『ひょうたん島問題』(明石書店)という、ロールプレイをしながら、現在の多文化共生について考えるような本があります。

あと『時事問題学習の理論と実践』(福村出版)ですが、これは報徳のときの国際理解の授業をちょっとまとめたものです。

いずれにしても、こういうシティズンシップとか、多文化とか、国際理解とか、社会科とか、開発教育という教育領域は、やっぱり私の中ではつながっているんです。グローバル・シティズンシップ教育というのはどういうものかということ、私なりの定義なんですけど、多文化、ボーダーレス、格差化に象徴されるグローバリゼーションが深まる中、世界のことや足元のことを自分ごととして捉え、連帯、共生を目指し、そのために社会に参画し、社会を変革し、創造していく。そういうグローバルで、かつローカル、グローカルというような造語があるんですが、グローカルな市民性を育てるのが、グローバル・シティズンシップ教育ではないかというふうに思っております。

これは一応、イギリスのNGOの人たちとかが掲げている、グローバル・シティズンシップ教育などの意向もくんで、柔軟に定義をさせていただきました。

国際理解教育とどう違うのかと言いますと、富士山の頂上を目指すのに、これら5つの教育領域が裾野だとしますと、頂上はグローバル・シティズンシップではないかなと私自身は思っているのです。ですので、それぞれが特別の分野、専門分野なのでというのではなくて、ちょっとこれを立体的に見ると、一番上にグローバル・シティズンシップがあるというふうに考えていただくのが、一番分かりやすいかなというふうに思っています。

2 ライフヒストリーとアカデミック・アイデンティティ

(1) 大学卒業後

個人的な領域になるのですがけれども、教師というのはやっぱり実践であり、かつ人格を離れて語れないんです。授業づくりなどの研究会で誰もが

できるマニュアルをつくることがあります、誰もができるというのは、それはそれで大事なことなんです、やはり人格が伴ってこそ誰もができるといことではないかなというふうに思っています。

技の伝承というのがありますよね。歌舞伎とか浄瑠璃とか、ああいうものでも、やはりそのお師匠さんのしぐさというか、何かそのちょっとしたものの言い方とかがすごく大事だという研究者がいるんです。私も実践というの、その人だからできるというだけではなくて、何かその人なりの雰囲気みたいなものが、実践に向かわせていくものになっていくんじゃないかなというふうに思っています。

1975年に私は大学を卒業しました。残念ながら1973年12月にオイルショックがやって来ました。翌74年、私が大学4年生になると企業の就職が全然なかったです。それが74年でして、ここにありますように、要するに初めて日本経済の右肩上がりダウンしたんです。初めてマイナス成長で、企業の採用はゼロになった時代がありました。で、大学生の就職先が公務員に集中したんです。公務員の中には一般公務員と教育公務員がありますので、教員を希望した人も多くいたんです。要するに、文系学部は全部社会科の免許が取れますから。私は社会科の免許を持っていますが、当時は国公立大学の教育学部を出ると大体雇ってもらえるみたいなのところがあったのですが、これが全然駄目にして、採用試験に2年続けて失敗しております。採用試験に失敗しちゃっていますので、私はあまり学生にはうかつなことは言えないんです。

その翌年、どこも行くあてがなく、広島市内の女子校に非常勤で採用されました。大学の進学をほとんど希望しない女子校の生徒さんを教えさせていただきました。高3でした。大学出たての私が、高3で、女子ばっかりの生徒ですので、今は女子大で偉そうな顔をしていますけれども、当時は非常に恥ずかしくて、こんなふうに正面を向いたらすぐに顔が赤くなって、本当に駄目でした。ですから、黒板を向いて説明をしちゃうんです。恥ずかしいから、天井を向いて説明をしたりする

んです。

それから、高3の日本史を担当しましたが、教育実習は附属高校でしたので、超難しい日本史を教えていて、同じようなことをその高校生に教えるわけです。誰も聞いてくれないんです。ということで、黒板を向いて説明したり、天井を向いて説明したり、正面を向いたら誰も聞いていないという状態で、1年でクビになりました。いや、本当にクビになりました。

だから、大学の教育実習とか教職というようなことは役に立つのだろうかというようなことをそのときに思っちゃいました。それで、友人と塾を始めまして。その塾も、大手の塾からこぼれてきた子をちょっとちょっとと誘っていく、そういうところでしたので。何か和気あいあいと、一緒に問題を解くような、対話型の塾をしていたんです。

そのときに、もう辞められましたが、広島大学の越智貢先生という道德教育で有名な方がおられるのですが、その先生とも一緒にやりました。ですから、2年間は定職にありませんでした。

(2) 報徳学園時代：生徒理解と授業改善

その後、報徳学園に求人が出たんです。社会科の教員に来てくれという公募です。私は出生が京都ですから、取りあえず受けました。報徳は、スポーツ学校だったけれども、これからの私立は進学クラスも設けないと駄目だということで、国立大学を出た人を採ろうということで、公募で、採っていただきました。本当に、クビを切られた非常勤の経歴が1年あるだけで合格しちゃったという、何かうそみたいな話なんです。しかも、試験がなく面接だけでした。何か本当に今なら考えられないような状況ですけども。

ただその当時、今は違いますが、その当時はスポーツばかりの学校でしたので、どのクラブも朝練を1時間ぐらい必ずするんです。大体、毎年夏の全国大会に7つ、8つ出る学校ですので、全国大会に出ないと部活の顧問じゃないという、そういう見なし方をされました。ですから生徒には授業中は休憩の時間でした。

それからもう一つは、やっぱり当時ですので、体育科の先生とか、部活の顧問が力の支配をしていたのです。私たちみたいな力のないような新任

の教員は、生徒が全然相手にしてくれませんが、寝て、起こしても、うるさいとか言って怒られちゃいました。そういうふうな出来事があり、ちょっとは行くのが嫌になったときもありました。

私は結局、力がありませんので、とにかく授業で勝負せなあかんなと思ったんです。まともな授業を、本当に、特に社会科に関しては、何かプリントを切って暗記ばかりさせていてというような、あるいは全く黒板に書いたりもせずに話ばかりしているだけの先生がいたりして、授業研究的には全然駄目な人が多かったんです。やっぱり授業で、生徒が、やっと分かったと、面白かったと言ってもらいたいがために、授業研究をしたという。これが実践に向かう意欲の第1です。生徒が面白かったと、つかつかと前に出てきて、先生、今日は面白かったと言ってくれるのが唯一楽しみでやっていたようなもんです。

授業は地理を持たされました。誰も地理をやりたがらないんです。専門的な分野を習ってきていない先生が多いので、地理をやらされました。ですから、地理をやるためには、本当に白地図をコピーして、色鉛筆を持ってこさせて、海と陸の境界を色ぬりしたりして、作業学習をやりました。作業学習をやるのと寝ないです。それからプリントを、ワークシートを作ると、取りあえず書きます。それを毎時間集めました。集めて、必ず見て、判子を押して、次の時間に返すというような、そういうことをやっていたのです。

だから、形式的には眠らせない授業になるんですが、作業学習をしながら、地理だからできたと思うんですが、ちょっとずつ生徒たちの活動をさせていくようなことをしたというのが、授業を始めて3年の、勤めて10年までの時期でした。

そのときは全然、国際理解とか、本当に何にもありません。地理の内容が一応世界地誌ですから、内容的には世界のことを教えるのですが、海外に行ったこともありませんでした。ここにありますように、1986年に初めて海外旅行をするわけですから。地理教師、見てきたよううそを言いとよくいいですよ。何か川柳にあるじゃないですか。僕らのころは、そんなんでした。本当に見てきたよううそを言うような。「兼高かおる世界

の旅」という、もうご存じないですかね。年配の方はよく、ああいうのばかり見ていたのです。

1986年に海外旅行に行きました。ちょうど若干円高になりまして、香港の難民キャンプを見に行きました。それから香港にすごいビルディングがあったので、日本以外にこんなビルがあったんかと本当にびっくりしたことがあります。

それからオーストラリア、ニュージーランドに行ったり。これは、兵庫県の私立学校の教員は夏休みに海外研修に行ける機会がありまして、それでニュージーランドとかオーストラリアに行かせていただきました。日本人学校に行ったりとか、現地の高校に行ったりとか、というようなことをさせていただきました。

その次に1988年に、神戸YMCAが当時やっていた「アジア大好き先生」というプログラムに応募しまして、ワークキャンプに行かせていただきました。初めての東南アジアです。当時まだタイは開発途上国です。つまり、初めて世界を知るきっかけになったのがこの時期です。

ですから、やっと、プリント形式で、地理で、何となく生徒たちが寝ないで済むような授業をしたのですが、地理的認識がどれだけ発達したとか、そんな、そこまでいきません。全然そこまでいきません。取りあえず、そういうような授業ができるようになりました。海外にも行きましたというのが、報徳の前半でした。

(3) 国際理解教育への萌芽

ちょうどその時期、1988年ですからちょうどバブルの一番大きいころです。バブル経済のときに、臨教審か何かの答申が出て、教育の国際化ということが言われたんです。各高校に英語科とか英語コースとか、国際科とか国際コースをつくれというような答申が出てきたんです。そうすると私立は割と反応が早いですから、これからは国際コースとか、国際科の時代だ。あるいは英語コース、英語科の時代だというふうなことで、今でこそグローバル人材と言われてはいますが、88年とか90年ですから、ちょうど30年前にも同じような時代があったんです。

そのときに、当時の校長が、国際コースをつくらと言われたのです。その先生は公立から来られ

た先生なので、そんなこともあって新しい試みをしようとしたのです。そして私とそのコース・カリキュラムを作る責任者になったんです。

この当時、英語科の人が国際理解をやるのか、社会科の教員が国際理解をやるのかで、ちょっと特徴が違いました。英語の先生が国際理解をやるのと、何となく異文化理解なんです。社会科の先生がやると、ちょっと歴史的なバックグラウンドとか、それこそ今で言うところの歴史総合とか、地理総合とかのことも含めた社会的な国際理解になっていくわけです。僕はそちらのほうになっていくわけですけども。

それで学校特設科目で、コースの特設科目として「国際理解」という科目をつくることになったのです。その「国際理解」は、高校2年生から週2時間の授業を合計4時間でその内容をつくる、そういうことも任せられて国際理解教育を勉強したというのが第2番目の実践に向かう意欲です。

私自身もちょうど直前に海外に行きましたから、そういう意味では、これからは国際化は大事だなと思っておりましたから、国際化のための教育というのを何か学校でやらせてもらえるらしいということで、校長の考えに賛成して、積極的に担うようになりました。それが2番目の実践に向かう意欲です。

ですので、自分から進んでお勉強をしたというのは、これができてからの話です。当時、帝塚山学院大学国際理解研究所というところが、国際理解教育奨励賞みたいなことをしてまして、そこに毎年優秀な実践例が発表されていたので、それをしっかり読んでみました。

国際理解教育学会はまだできていませんでした。1990年ぐらいに日本国際理解教育学会ができるんです。ですので、学会としてはありませんでした。それから、グローバル教育学会というものもございいますが、それもまだ研究会の段階でした。

唯一、NGOで開発教育協議会というのがありまして、今、開発教育協会（DEAR）と言われているんですが、それが開発教育といえますか、海外のことを扱っていました。

ですので、私が最初に国際理解について考えたときに飛び付いたのが、この開発教育でした。実

践的には、帝塚山学院大学国際理解研究所の『国際理解』という機関誌なんですけど、それを研究させていただきました。国際理解というのはこういう感じやなというのをつかんだのが、その時期です。一応、高校教諭は大体週16時間ぐらいが平均の持ち時間でしたが、4時間ぐらい減らしていただいて、その間に勉強せいというようなことで、勉強をさせていただきました。もちろんクラスも持った上での話です。

それから関西の場合、開発教育に関心のある先生方が集まる研究会がありまして、そこにずっと行っておりました。国際理解教育では非常に名高い、今は北海道教育大学の名誉教授をされていますが、大津和子先生が中心になってやっておられたのが開発教育ですが、毎年、二ヶ月に1回ぐらい、京都のところで一泊研修をしていました。現場の教員ばかりだったので、なかなか面白かったです。のちに『新しい開発教育のすすめ方』という本として出版しました。

クラスの担任をして、そして国際理解（グローバルスタディーズ）という科目を実践したのが1991年です。その実践した外国人労働者問題という単元をつくって、それを国際理解教育の奨励賞に出したら、賞を戴きましたので、何となく他からも評価してもらえるんだということが分かりました。そういうようなことが、あのころの時代です。

ですので、後半は国際コースとともに歩んできました。そして国際理解教育とともに歩んできたということが言えるのではないかと思います。

それからもう一つ大事なことは、いわゆる私立の教員ですので、公立的な研修の機会というものはものすごく限られているんです。ですので、自分で進んで出向いていくしかなかった。逆にそれがよかったのかなと思います。身銭を切っていくわけですから、よかったかなというふうに思います。

国際コースは、今はもう報徳学園にはありません。なぜなのかといいますと、国際的な分野というのは女子の方が関心があるんです。だから男子校、報徳学園は男子校ですが、男子校では生徒が集まらなかったんです。20人とか。大体私立は45人ぐらい集まらないと、1クラス、採算が取れ

ません。だから半分ぐらいしか集まらなかったの
で、経営上あかんとされました。

今は進学コースになっていますが、国際コース
は10年ほど続きましたか。そのときに、終わりの
ころになります。実は大津和子先生が、兵庫
県の先生をされていて、兵庫教育大学の大学院に
現職教員で行かれたんで、私も現職で行けるんじ
ゃないかと思って校長に相談したら、私立学校に
はそういう制度がないんです。今はあるかもしれ
ませんが、ないんです。です。辞めてから行
ってくださいと言われてました。行くのだったら辞
めなさいと言われてました。ちょっとそこまでは
できないので、兵庫教育大学の大学院に行くのは諦
めました。同志社大学がちょうど教育に関する大
学院をつくったところだったので、そこに働いた
まま行かせていただきました。報徳学園は西宮に
ございますので、そこから通いました。

(4) 大学教員時代

それから大学教員になるんですが、富山大学に
行かせていただきました。富山大学に5年行かせ
ていただいて、その後同志社女子大学の教員に
なって、教職系を主に持つことになりました。

同志社女子大学は、現代こども学科というところ
に今もいるんですが、当時はこども学科が付いた
四年制大学はありませんでした。教職課程だけ
でもないです。教育、教育していませんので、も
っと広い視点から見られるのも面白いんじゃない
かということで、公募に応募したら、運良く採用
していただいて、ここに勤めて現在に至っている
というのが実情でございます。

富山大学のときに教職系で一番ショックだった
ことがありました。富山市立堀川小学校というの
があるんです。ここは富山の小学校ですから、成
人式じゃないですけど、6年生になったら立山に
登るんです。3,000メートルの立山に小学生が登
るわけですから、ものすごく大変なことです。そ
れを「立山登山」という単元で、5年生から2年
間かけてずっとやるんです。5年生、6年生が、
ずっと「立山登山」でやるんです。授業を見て、
びっくりしまして。でも子どもがものすごい話を
するんです。議論をするんです。びっくりしまし
て。これを指導している先生ってどんな先生なん

だと。なかなか上手なんです。黒板の板書の仕方
も上手です。私は高等学校の教員でしたから、小
学校のそういう先生のような学び方、教え方のス
タイルを全然知らなくて本当にびっくりしました。

富山大学教育学部の学生の教育実習の学校にも
なっているのですが、附属小学校だけじゃなくて、
ここも戦前は附属だったので、そこにも行くん
ですが、やっぱり学生もものすごく戸惑っていま
した。でも、やはり子どもを、要するに教科書の
ない状況で、「立山登山」という教科書はないで
すよね。でも、カリキュラム的には理科や社会の
総合です。だって立山のいわゆる自然もあるし、
野鳥もいますよね。社会は、立山の歴史もあるし。
それを全部総合的にやっているんです。

なので、子どもを、そういう教科書のないよう
な授業時間をつくっていくというのに初めて出会
いまして、こんなことができるんだと思いました。

いわゆる教科教育学的には駄目なんです。きち
んとした目標があるわけでもなし、教科の内容が
体系的にあるわけでもない。だから、教師と子
どものいわゆる臨時的な関係の中で生まれていく
授業だったんです。今だったらものすごく評価さ
れていると思いますが、当時はこういった小学校
というのは、戦後の初期社会科には多くありま
したが、そういう伝統をずっと守ってこられた
学校です。ここら辺でいうと、奈良女子大学の
附属小学校ですか、そういうところが近いかと思
います。やっぱり授業研究というのが大事にな
る、いわゆるレッスンスターディーズと言いま
すが、それが大事だなと思いました。

これが、いわゆる現場の教員ではないんですけ
れども、教師教育に関わって、実践に向かうとい
うことの3つ目ぐらいの大きな転機だったと思
います。それがなければ、僕は多分総合学習に
対する考え方もうまくいかなかったと思います。
ですから、初等教育は非常に大事です。初等
教育は、日本の場合には教員が全教科を教え
ますけど、だからこそ総合学習がまだ日本の
場合はちゃんとできるんです。

最後になりますが、現在はグローバル教育
についての本をまとめたり、それからスタ
ディツアーの本をまとめたりしています。スタ
ディツアーの

本ができるのも結局、そういう教科書のないような内容をどういうふうに学びに結び付けていくか、という問いがあったからこそだというふうに思っています。

まとめますと、グローバル教育というのは、例えば私がやったように、公民でやる場合は教科の中で国際理解の視点を入れていく、それから国際理解という一つの単独科目でやる場合、それから大学のような、そういう教科ではないところでやる場合の3つに分かれていくと思うんですが、それぞれについて、自分なりの教師としてのバックグラウンドになっていきます。カリキュラム的なそういう創作力も含めて、あるいは内容的な専門的な経験も含めて、教科でやる場合と、総合でやる場合と、大学のいわば大きな科目でやる場合の違いになっています。

私にとって実践を担う教育としてグローバル教育があったということです（小括1）。グローバル教育が社会科のいわゆる公民の分野の実践を可能にしてくれました。グローバル教育が国際理解と出会わせてくれました。グローバル教育がスタディツアー等々と出合わせくれた。グローバル教育がカリキュラムをどうつくっていくかということをも可能にしてくれた。グローバル教育がいろいろな共同研究とか体験とか、そういうものと出会わせてくれたというふうに思います。

（小括1）実践を担う教師とは？
結節点としてのグローバル教育
（国際理解教育、開発教育）

- ①グローバル教育が、社会科、と出会わせてくれた
- ②グローバル教育が、国際コース・国際理解（Global Studies）、と出会わせてくれた
- ③グローバル教育が、スタディツアー・海外体験学習、と出会わせてくれた
- ④グローバル教育が、カリキュラムデザイン、と出会わせてくれた
- ⑤グローバル教育が、自己研修や共同研究、アウトリーチなど多様なリソース、体験、と出会わせてくれた

ところで、社会的には、3つの研究のスタイルがあるとよく言われています（小括2）。社会科とは何かみたいな原理的研究と、じゃあそれに基づいて授業をつくらしたらどうかみたいな開発的研究と、それから具体的な授業とか教師の語りを通して見ていく実証的・体験的研究の3つのスタイルがありますが、私は、やはりこういう自分の

授業開発、開発的・実践的研究というのが、履歴を見た場合に、まず最初にあって、その後、大学教員になってから、シティズンシップ教育とは何かとか、グローバル教育とは何かという、〇〇とは何かみたいな原理的研究に入っていきます。そして最後は体験学習のようなものやっていたというふうに、体験学習はある意味、実践家としての関わりかなというふうに思います。

ゲートキーピングという言葉が最近よく言われています。これは、社会科では渡部竜也さんという東京学芸大の先生がよく紹介されている、ソートンさんという人ですが。公立、私立を問わず、与えられたナショナル・カリキュラム、学習指導要領の中で、見えない拘束力の中で少しでも授業を改善し開発的な実践研究を行おうとする意欲的な社会科教師は、教科書に書かれた教育内容に、社会科学の観点から吟味を加え、批判的に検討し、現実の世の中の出来事や社会問題と照らし合わせ、また社会に生きる学習者の状況を考慮しながら、社会科で学習することの意義や狙いを定め、社会科の授業体系を考案し実施をする。これがいわば現場で生起する授業づくりであって、生成されたカリキュラムといえるということです。

学習指導要領に沿って、あるいは教科書に沿ってやっても、その教師個人の自分なりの、ゲートキーピングですから、ちょっとふるいにかけるという感じです。ゲートキーパーというのは門番ですから、いろんなものを受け取るんだけど、自分の中でそれを単純にマシンのように反応するんじゃなくて、そこでいったん滞留させて、吟味して、外へアウトプットするような、そういう作業を現場の教員は実はやっているんじゃないかというのが、ゲートキーピングの考え方です。

ですので、ここにおられる皆さんも、現場の先生方も非常に多いと思いますけれども、やはりそういう自分の中で消化していく、そういう時間を大切にされるということが大事なというふうに思います。ただそのためには、ここにありますように、やっぱり現実の、特に社会科ですから、現実の世の中のこととか、あるいはもうちょっと理論的なことも当然含めて勉強をしないといけないとは思いますが、機械的に何も繰り返して、教科

書だけを教えていいわけじゃないというふうには
 思います。

これは、私の実践で見たときに、3 つぐらいあ
 ります。最初にやった実践が中学校3年生の公民
 的分野の授業実践です。ちょうど香港に行ったと
 きに、香港の都市景観がものすごくショッキング
 でしたので、アジアの成長というものについて当
 時実践しました。今となっては、台湾にしても、
 シンガポールにしても、香港にしても、韓国にし
 ても、あるいは中国にしても、はるかに日本と肩
 を並べるか、それ以上の経済成長のところがあ
 りますが、当時20年も前は、そういうようなこと
 ではなかったもので、それをまず取り上げました。

ですからこの場合、やはり、こういうような経
 済の相互依存性の認識とか、学問的成果みたいな
 ものも必要になります。それから国際理解の場合
 は、外国人労働者問題を含めて、今はちょっと、
 当時は中東から出稼ぎに来た人がたくさんいたの
 で、そういう問題もあって取り上げました。ただ
 やっぱり、学校の中にたくさんそういう外国籍の
 子どもがいるとか、外国人の子がいるという
 状況ではありませんでしたけれども、やがてはそ
 ういう時代になるだろうということで、こういう
 単元をつくりました。

ですので、この単元を私もし創っていなかった
 たら、ひょうたん島問題もなかったし、現在もい
 ろんなところに行って、今日の実践報告にもあり
 ますように、多文化地域に行っているいろいろを聞
 くということもなかったというふうに思います。

ですので、最初は自分の授業づくりをしていた。
 次に大学の先生になると研究者としてちょっと難
 しいことも言わないといかんで、2番目の研究
 になります。それから3番目は、じゃあ自分で実

践をやったときにどうなのかというようなことが、
 実践に向かう教師のまとめになります。

3 なぜグローバル・シティズンシップ?

ところで、グローバル・シティズンシップです
 が(小括3)、これは実は、ポストESDとポスト
 MDGsと2つのことがあるんじゃないかという
 ふうに、これは私の見取り図です。ユネスコの方
 式にこういうことがあったわけではないんですけ
 れども、例えばESDというのは2005年から
 2014年ですか、持続可能な開発のための教育と
 いう国連の10年がありました。これはリーディ
 ングカントリーで、日本政府が結構提唱してきた
 んです。なので、文科省も、ユネスコスクールを
 つくるように結構働き掛けました。ESDに関す
 る教育をやりなさいというようなことで、日本で
 は、ユネスコスクールの数は世界でも最大じゃな
 いですか、1,000校を超えていますから。それが
 2014年に終わりました。

もう1つのMDGsというのは、ミレニアム開
 発目標といいまして、2001年から2015年までの
 15年間に8つの開発目標を達成しようというの
 が、国連で決められました。その後、ちょうど
 ESDとMDGsが2016年ぐらいから一致するの
 で、ポスト2015ということで、グローバル・シ
 ティズンシップ・エデュケーションのことを
 GCEDとユネスコでは言っているみたいですが、
 実はGCEというのは、グローバル・キャンペ
 ーン・フォー・エデュケーションみたいな別の何か
 略称があって、紛らわしいのでGCEDにした、
 「ジーセッド」という呼び方も今はしていますが、
 これが、今ユネスコが提案しているものです。

こういうのが出てきまして、この春に、私も5
 月にジャカルタであったユネスコの大会にも行っ
 てきました。ユネスコが提唱する学習の原理が5
 つほどありまして4番目まではずっと以前から言
 っていたんです。①知るための学習とか、②なす
 ための学習とか、③共に生きるための学習とか、
 ④人間存在を深めるための学習とか言っていたん
 ですが。これを、ポストESDの後、⑤自己変容
 と社会変容のための学習、つまり自分が変わり、
 社会も変わらんとあかんような学習が大事だとい

(小括2) 実践を担う教師から研究者へ? 研究のメタ的なふりかえり

①最初は、社会科教育、国際理解教育、開発教育、グ
 ローバル教育の原理、本質ではなく、日々の授業作りか
 ら始まった(B: 開発的・実践的研究)。

②次に、教科書やテキスト分析を通して、社会科教育、
 国際理解教育、開発教育、グローバル教育とは何かの追
 究が始まった(A: 規範的・原理的研究)。

③現在は、開発教材のアウトリーチや地域や学校の調査
 から教材や単元づくり、カリキュラムの検証を行ってい
 る(C: 実証的・経験的研究)。

うことで、5番目を加えたんです。それを5番目に加えたときが、いわばグローバル・シティズンシップ教育と一致するわけです。

ですので、グローバル・シティズンシップ教育というのは、何も知識を獲得するための学習じゃないわけです。シティズンシップ教育の一つですから、やはり自分が変わり、社会が変わっていくということを前提にしたものでないといけないと思っています。

ユネスコのGCEDは世界各国で言われています。日本では地球市民教育とよく言います。韓国は世界市民教育と言います。中国は市民という言葉を使いません。全球公民教育とか、そんな感じで一応翻訳することがありますが、英語的にはグローバル・シティズンシップ・エデュケーションとなります。

日本は、ユネスコでは道徳教育に分類されているんですが、本当にそうかなと思います。品川区とか世田谷区とか、若干あるじゃないですか、市民教育の道徳的なやつ、そんなのも考慮に入れて言っているのかなと思ったりします。

それから、ジャカルタのネットワーク会議のときに出てきたことですが、文科省の人とか、日本からの国際理解教育学会の私も含めて、韓国の人も含めて、SDGsとグローバル・シティズンシップ・エデュケーションを結び付けましょうというような、そういう大きな大会でありました。

一応、同じユネスコですので、SDGsの4番というのは、「質の高い教育」という目標があるんです。質の高い教育というのは、例えば途上国では、今はもう就学率はほぼ8割から9割は達成されているんです。学校に行くことはできているんですが、修学の修は、就職の就じゃなくて、修めるの修ですが、全部の課程を修める修学率は低いんです。それは途上国でいうと、教え方の問題があったり、施設の問題があったり、いろいろするので、質の高い教育というのがSDGsの4番なんです。それにユネスコはちょっと力を入れましょうということで、いろんなこういう英語の単語をキーワードに並べたり、こういう4つの行動目標を作ったりというようなことを挙げております。

一方、韓国にAsia-Pacific Centre of Education

for International Understanding、(APCEIU:アジア太平洋地域国際理解教育センター)というのがあります。ソウルにあるんですが、アジア太平洋をネットワークにしている、そこではこういう「相生」(サンセン)という、共に生きるですか、そういう機関誌を出しております、SDGsとか、グローバル・シティズンシップ・エデュケーションについて特集しております。

日本のユネスコスクールのESDのテーマなんですが、これは文科省の国際統括官付の徳留さんという方が発表された資料を引用しているんですが、残念ながらグローバル・シティズンシップ・エデュケーションに関しては、非常にテーマ的には選ばれていないというのが、ユネスコスクールの課題です。環境および国際理解、人権、平和みたいなものもあります。環境も多いです。ユネスコスクールを申請するときに、何をその学校の売りにするのかということがあります。その場合、大体環境とか、この場合は国際理解というのは、多分異文化理解的なバックグラウンドの国際理解ではないかというふうに思います。

まとめますと、なぜグローバル・シティズンシップ教育かということ、最近のこういう国際的な機関の動向、文科省の動向で、グローバル・シティズンシップ教育を取り入れていますよというアピールです。

文科省のESDは、グローバル・シティズンシップ教育とは言いませんが、ある意味、目標の裏にそういうのがあるんじゃないかと思います。文科省もなかなか市民教育という言い方はあまりしません。公民という言葉をよく使います。

それから、これはちょっと国際的な文脈ですが、もともとグローバル教育というのはアメリカとか、イギリス、そして日本にもありました。あったので、今更何をというのは、私なりのそれは個人的な感想なんです。昔からあったので、こんなふうに70年代ぐらいからありましたという、一つのデータとして提供しておきます。

ユネスコはもちろん「平和の砦」を築くための機関ですので、もともとは平和や人権教育がユネスコの多分メインだと思いますけれども、単純にグローバル・シティズンシップ教育とユネスコが

言ったときに、それは多分平和とか人権とかが必ずバックグラウンドにあるということもちょっとお含み置きください。

**(小括3) なぜグローバルシティズンシップ教育？
ユネスコ、APCEIU、文部科学省の最近の動向**

- 1、ユネスコは、Post 2015 (Post MDGs および Post ESD) の取り組みとして、GCEDを提案している。
- 2、各国の取り組みは、まだはじまったばかりであり、学校や社会のどの領域でとりいれるのか、デジタル時代への対応はどうするのか、各国の情報交換、ネットワークの課題に直面している。
- 3、APCEIUは、GCEDのための資料を用意している。韓国ではGCEDは世界市民教育とよばれて、取り組みがはじまっている(世界市民活動館、Global Citizen Campusなど)
- 4、日本では、国連ESD10年(2005-2014)の間に、ユネスコスクールが多数認定され、現在では1000校をこえている。よい実践事例もある。

4 Global citizenship Education-交差するそれぞれの文脈

いつとき、第二の戦後、これは私の言葉なんです。冷戦終結後、紛争が多発しました。1990年前後、今も世界の難民は多いですが、そのころはアフリカのルワンダとか、ウガンダとかの難民とかが非常に多かった時期がありました。冷戦で米ソのくびきが取れて、重しが取れて、地域に紛争が起きました。それから、旧ソ連の中でも民族紛争が起き、ユーゴでも民族紛争が起きたという時期があって、そのときユネスコは、やっぱり平和の文化をものすごく強調しますよね。そういうような時期が20年ほど前にありました。

先ほど言いましたポスト2015でのSDGsの話ですが、方向性としては、全連関的とか、対話的とか、批判的とか、そういう、あるいは価値を充実するとか、いわゆる網の目的なつながりを重視する、ホリスティックとよく言いますが、そういう言葉が重要なキーワードになります。

これも実は70年代ぐらいから、アメリカにしてもイギリスにしても、グローバル教育とかシティズンシップ教育をやってきたのです。

日本の場合もいろんな学会があるんですが、異文化間教育学会というのは、ちょうどバブルのころに、海外から帰国する子どもの適応が問題になっておりまして、そこから生まれてきた学会が異文化間教育で、今はもっと、外国にルーツを持つ子どもたちの課題に移っています。

私たちの国際理解教育学会も、最初は国際化教

育の絡みでできましたが、今はグローバル化にシフトして、グローバルとは何かというようなことをやっています。それから開発教育協会も、開発教育から持続可能な開発教育に行って、今はSDGsに結構テーマを移しています。

なぜ、グローバル教育、シティズンシップ教育なのかというと(小括4)、ユネスコは戦後初期から、世界市民性教育とよく言われていたんですが、エデュケーション・イン・ワールド・シティズンシップという言い方をして、いわゆるシティズンシップというのは、もともとあったということです。何も今出てきたわけではないということです。

**(小括4) なぜ、Global Citizenship 教育？
それぞれの文脈**

- 1、ユネスコは戦後初期から世界市民性教育(Education in World Citizenship)などの公的側面に言及し、1974年の「国際教育」勧告においても、世界市民性やグローバルな視野、世界連帯意識の育成を掲げ、公的(倫理的)側面や理念を強調してきた。
- 2、グローバルシティズンシップ教育の前身ともいえるべき、グローバル教育(GE)は、1974年の「国際教育」勧告とクロスしながら、アメリカ合衆国やイギリスで、それぞれカリキュラム開発や教材開発、教師教育が行われてきた。
- 3、グローバルシティズンシップ教育(GCE)は、ミレニアム期の教育としてイギリスのNGOが、WSや開発教育、GEを継続、発展させてきたものである。一部は、イギリスの新教科「シティズンシップ」にも採用された。
- 4、歴史的には、World / Global Citizenship に関与してきたユネスコは、GCEDのプロジェクトとして、ESD10年の実績をふまえ、MDGs, SDGsとクロスする教育をめざし、学習目標や学習内容に言及している。

それから1974年に国際教育勧告というのができました。そこにもグローバルな視野とか、ものの見方とか、世界連帯意識とか、そういう価値的な側面もユネスコはもともとと言っていました。

それから、アメリカやイギリスは、そういうユネスコの国際教育勧告と前後して、グローバル教育とか、ワールドスタディーズが出てきました。

この3番目ですが、イギリスにはシティズンシップという教科があります。今はちょっと下火になっていますが、ちょうど日本の総合学習と同じ時期に実施に移されたシティズンシップという新教科ができたんです。私も2000年ごろから毎年イギリスに行って、学校を見せてもらったりしていました。シティズンシップの授業もたくさん見せていただきましたけれども、今はなかなか見せてもらえません。イギリスはやっぱり政権が変わるとかなり変わります。今は保守党の政権ですし、しかもEUの離脱の話もあるので、ちょっと内向きみたいになっています。でもシティズンシップという教科が出てきたので、イギリスではグロー

バルという視点が出てきましたということです。

これは、イギリスの NGO の Oxfam というところが出している地球市民のための定義です。これは私が最初に言った、みんなはつながっているとしたところを書いているところと割と似ているところがあるんじゃないかと思います。イギリスの NGO は、公正とか平等とかそういうキーワードがやっぱりきちんとあります。それから持続可能というのが入っています。これは、知識、技能、価値、態度に分けたキーワード、学力概念です。

こちらは、私たちの学会でつくっている国際理解教育の枠組みを示したものです。一応大きな学習内容領域としては、A（多文化社会）、B（グローバル社会）、C（地球的課題）、D（未来への選択）とあるんですが、この最後の未来への選択は、A、B、C の上に乗っかるような感じでつくっていますので、若干目標概念とかぶっているところがあります。これは、育成すべき人間像です。学会として一応討議した結果の最大公約数の目標概念です。分かりにくい言葉があるかと思いますが、一応学会的には、市民性としては、ローカル、ナショナル、グローバルと、重なり合うアイデンティティーを市民概念に設定しています。これは学会として、なかなか公式見解というのを出すのは難しいと思うので、ちょっと広く取っています。

これは、ユネスコから出た、*Global Citizenship Education: topics and learning objectives(2015)* という本です。まだ翻訳されていませんが、市民性の定義やグローバルシティズンシップの学習内容を論じています。これは、地球市民とは何かというとき、基本的には、相互依存とかつながりとか、普遍的な価値とか、あるいは多様性とか、多元性とかいうことがキーワードになっているかと思います。

これは学習者像です。グローバル・シティズンシップ教育は学習者には次のことができるようにするという、ちょっと個別に説明できませんが、7つの学習者像を設定しています。目標概念も図解されています。いわゆる知識理解的な項目と、価値的な項目と、それから態度、行動的な目標の3つに分けています。これはその翻訳です。

なぜグローバル・シティズンシップ教育かとい

うと、何を知るか、何をめざすかということ、それぞれ、イギリスの NGO とか、日本国際理解教育学会とか、ユネスコとか、いろいろ比べてみても、若干色合いの違いはあるけれども、それぞれの学習目標を設定したり、多元的な市民性、多様性とか重層性みたいなもの、あるいは公正とか正義とかというキーワードを入れています（小括5）。だからグローバル・シティズンシップの中身は、そういう意味では、公正、正義とか、多様性、相互依存とかが分かる、あるいは持続可能が分かっていく人だというふうに考えていただいているのではないかと思います。

**（小括5）なぜ、グローバルシティズンシップ教育？
何をめざし、どんな内容を教えるのか**

- 1、OXFAMやJAIE（日本国際理解教育学会）の学力観や基本要素は、知識・理解、技能、価値・態度というオーソドックスな3要素である。他方、UNESCOは、認知、社会・感情、行動というよりコンピテンシーに近い3要素を採用している。
- 2、三者とも、ローカル、ナショナル、グローバルという重層的で多元的なレベルから学力や能力、あるいは、グローバルシティズンシップを捉えている。
- 3、OXFAMやUNESCOでは、社会正義や不平等への批判的思考、多様性および人間の共通性への感覚、持続可能性への関与など、人権やSDを基礎にしたグローバルシティズンシップを提起している。他方、JAIE(2010)は、それについてはライトになっている。
- 4、OXFAMやUNESCOは、望ましい目標や学習者像を提示しており、評価規準を設定しやすくなっている。

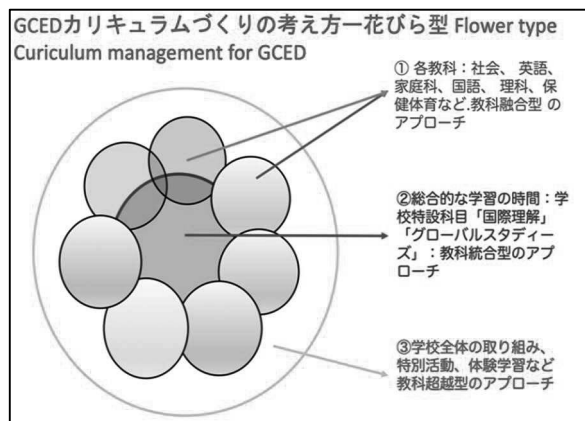
5. グローバル・シティズンシップ：カリキュラムデザインの方略

では、グローバル・シティズンシップ教育どう実践していくかと言うことですが、この花びらの図でいうと、国語や社会や理科とかの中で、教科の中でやっていくグローバル・シティズンシップ教育のことを、教科融合型というふうに呼んでいます。

それから一定の単独科目、例えば今日の報告にあります、神戸大学附属中等教育学校なんかでは、探究の時間というのが確かあったと思いますが、そういう単独の教科の中で教えていく。私が報徳学園で、「国際理解」の中でやったのと同じように、一つの教科をつくっていく考え方です。一つの教科をつくっていくような考え方が、教科統合型のグローバル・シティズンシップ教育と呼んでいます。

それと学校全体で、スタディツアーを含めて行事とかでやっていくようなものが、教科超越型のものでもあります。

中国の先生もこういうところはよく理解してくれてまして、教科でやったらいいのか、総合のように学校の活動の時間でやったらいいのかというようなことをよく議論されています。この前南京に行ったときにも議論になりました。



じゃあ、学校で実践するときはどうなのかというと、こういう花びら型という、真ん中に統合的な授業科目、総合の時間みたいなのがあって、私の「国際理解」もそうですが、これを支えるように、花びらがあって、各教科でもやれる。それから大きな枠の学校があって、学校全体で取り組む、3つのことが当然可能ですということです。

これを例えば1年間のカレンダーみたいにしていくと、こういうふうになっていくというのがこの例でございます。これは寝屋川の中学が、今ESDの研究指定校になっているのですが、今度来週の水曜日に公開研究会があるんですが、そこでちょっと僕は相談に乗らせていただいている、ESDカレンダーのようなものを作られてたものです。各教科でやるESDの教科融合のパターンと、総合でやるパターンと、学校全体の中の行事、修学旅行とか遠足とか、そういうようなものでやるパターンの、全体が見えるようなカレンダー式にしています。この花びらを年間計画に移してみたのが、このカレンダー型の関係表作りです。いわゆるカリキュラム・マネジメントみたいなものが、こういうふうなものだと思います。

これは大阪市立南小学校の事例です。兵庫教育大学の教職大学院の院生さんでもある現職の池田花笑子先生は、研究主任として、この学校で児童の半分が外国にルーツを持つ子どもなので、地域のこととか、それから地球のこととかを考えさせ

るような総合学習をされています。

最後は、宮城県仙台二華高等学校ですが、SGHの学校で、仙台では超進学校ですが、「グローバルスタディーズ」という、探究科目があって、そこで実践されています。これは特設科目ですから、いわゆる教科統合型というようなことが言えるんじゃないかと思います。

これは、大阪市立南小学校の全体カリキュラムです。ESDの6つの要素を入れておられます。これはESDあるいはSDGsならではの、多様性とか、相互性とか、有限性とか、公平性とか出ていますが、それぞれを大きなキーワードにして学校のカレンダーを作っているというのが、このカリキュラムのつくり方にあります。

最後になるかと思いますが、グローバル・シティズンシップというけれども、どういふふうにしていったらいいのかというようなことで（小括6）。

学習指導要領では、今、学習評価がちょっと変わりましたよね。要するに、何を知っているか、何ができるかではなくて、どう扱うか。知っていること、できることをどう扱うか。それから自己判断、表現をどうするか、それから学びへ向かう意欲は何なのかというようなことです。そんなことが新しい指導要領で出てきました。その一つの方法としてアクティブラーニングがあると言われていています。

こういうふうなことから見ると、これからは、授業評価の問題が、グローバル・シティズンシップ教育をやる場合にも出てくるんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと後半は駆け足で話をさせていただきました。ありがとうございました。

（小括6）なぜ、グローバルシティズンシップ教育？ 学習をどう組み立て、実践し、どのように評価するのか

1、新学習指導要領（2017年告示）では、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③学習意欲の3つの資質能力が示され、知識では「何を知っているか、何ができるか」、思考・判断・表現では「知っていること・できることをどう扱うか」、学習意欲では「どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか」がキーワードだと指摘された。日本においてGCEDは、このような学力観に応えるだけの教育実践の可能性を、そのカリキュラムデザイン、授業構想力、アクティブラーニング（主体的、対話的、深い学び）を取り入れた授業実践などの成果をあげている。

2、しかし、学校の発達段階や教科（教科融合）や総合（教科統合）、学校全体（教科超越）の教育実践の可能性から見ると、学校、コースや単元、個別的な授業実践など、カリキュラムマネジメント、テーマやトピックの設定、授業評価など、エビデンスベースの課題が残る。

3、1000校を超えるASP（ユネスコスクール）においてトピックと実践をGCEDに変えていくこと、バカロレア校（例：東京学芸大学附属国際中等学校、同志社国際学院初等部）など国際標準のカリキュラムにおいてGCEDを意識することなども重要であろう。